

豊庄だより



第681号 2022年10月11日

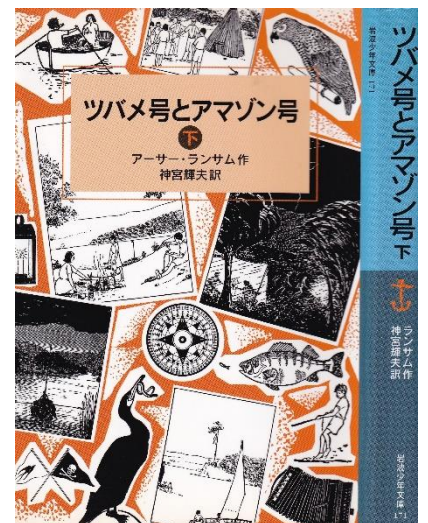
福岡市早良区南庄2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

私は出かけるとき、バックの中に本がないと落ち着かなくなります。でも、一度もバックから取り出さず持ち帰ることもしばしばあります。持っていく必要なんてないじゃないかと思われかもしれませんが、持っているだけで安心するのです。出張等で遠方に出かけるときは、出発間際まで、本棚を眺め（並んでいるのではなく、積んでいるのを一冊ずつ取り出し）、どの本を列車の中で読もうかとしばし思案します。途中まで読んでいる本を旅先で読み上げると、次の本に困る。でも、たくさん持っていくと荷物が重くなる。あれこれと考えた挙句、数冊を厳選します。しかし、悩みながら選んだ本が面白くなく、旅先で立ち寄った書店や古本屋で買ってしまうこともしばしばあります。

現在はこんな風ですが、小・中学校時代は、家にはたくさんの本があったにもかかわらず、ほとんど読んでいませんでした。2歳年上の兄は親から（少年少女向けの）世界文学全集を買ってもらい、全30冊近く of 分厚い本をよく読んでいたのを何となく覚えています。あまり本に関心を示さない私に、父親はよく本を買ってきて与えてくれました（クリスマスプレゼントはいつも本でした）。この時の本は読んでいたのですが、「その本をきっかけにして次の本を読んでほしい」という父親の願い（思い）は私には届いていませんでした。本のことで今でもよく覚えていることがあります。小学生の頃です。父と一緒に博多の街にバスに乗って出かけ立ち寄った本屋で、（家では見たこともない）月間の少年漫画が目に入り、「これが欲しい」と言ったことがあります。すると父は、「この本を買うお金があれば、家までのバス代になる」と言われ、かないませんでした。残念な気持ちはありましたが諦め、帰りのバスの中で、切符を握りしめていました。

本との距離に変化が出てきたのは、高校時代の後半からです。高校3年を迎える春休みに、夏目漱石の本を手に取り読み始め、ぐんぐんと引き込まれ、主だった長編は読んでしまいました。外国の小説にも目が行き、デュマの『モンテ・クリスト伯』文庫本7冊を読んでしまいました。なぜこんなに読めるようになったか、自分でもわからないくらいでした。受験勉強からの逃避？ そうだったかもしれません。

思い出話の最後に、父親が与えてくれた本で、今でもよく覚えている本を紹介します。それは、リンドグレンとアーサー・ランサムです。どちらも海外の児童文学でした。日本の生活との違いが新鮮で、本の世界に引き込まれていきました。『名探偵カッレくん』など、リンドグレンはほとんど全部読みました。続いて読んだアーサー・ランサムは、イギリスの湖水地方が舞台で、夏休みにそこでキャンプをし、ボートに乗り探検をする子どもたちの物語でした。日本の児童文学、例えば『次郎物語』などと違い、そこには明るい「夏の光」を感じました。このシリーズは、全部で12冊あったのですが、1冊目の『ツバメ号とアマゾン号』しか読んでいません。2冊目以降のシリーズを父が買ってくれなかったためでした。なぜそうなったのかは、学生時代に父と話している時、「達（私のことですが）が、アーサー・ランサムはあまり好きそうでなかったのだから、買ってこなかった」と言われ、そうだったのか、あの時もっとアピールしておけばよかったと思い、そのことを父に伝えました。父は何とも言えない表情をしていました。



それから数十年後。H中学校に勤めていた時のことです。図書室の廊下に、この全集がなんと、「廃棄処分」というハンコを押され、ひもで縛られて積んでありました。「何てことを！」と思いましたが、担当の先生に話し、いただきました。『ツバメ号とアマゾン号』が、日本で出版されたのは、1967年。図書室で何年も眠っていた本はいま私の手元にあり、ページをめくれば、そこに新たな世界が広がります。